



# 聖一國師の 足あとを訪ねて……

風俗研究家 植原路郎

行けと群衆が集まったと言われている)

国鉄博多駅は、むかしの承天寺境内の一部と推定されている。この寺院周辺がいかに壮大なものであったかは、想像することも出来ない。承天寺と言えば、聖一國師との深いつながりがまず考えられるが、修業時代の名は辨圓で三十四歳の時宋の国に赴き六十年の留学を終えて博多に帰って来たのは、仁治二年(一二四一)であった。宋の国へ留学しよう

とした動機は、鎌倉寿福寺において、僧了心の講義を聞いた時、質問して、明答が得られなかったための発奮である。

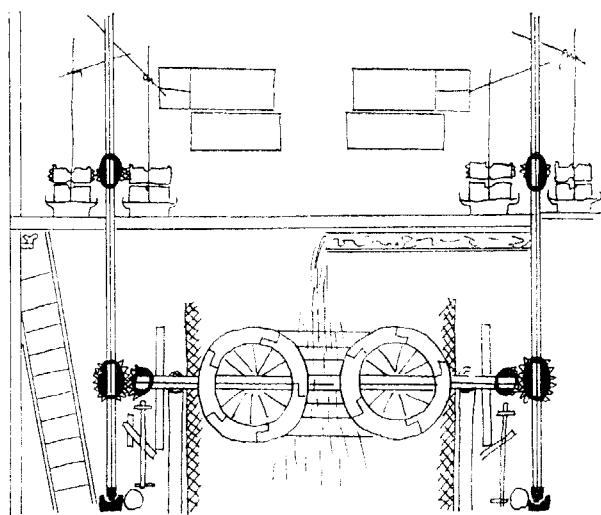
帰国した時、僧湛慧にすすめられてい崇福寺を開いたが、仁治三年博多で謝国明に請われて承天寺を開いた。(このころ飢饉が起り承天寺で蕎麦粉を住民に振舞ったことが伝えられている。お助けの粉を承天寺にもらいに

話は変わって、関白九條道家(一一九三-一二五二)が東福寺(京都東山)の建築を志し、辨圓を迎えようと考えていた折柄、承天寺が

火災に遭ったが、やがて復興の道が開けた。この時、辨圓は京都に帰ったが、建長五年(一二五三)、右眼の明を失った。九條道家が

慕じた前年のことである。辨圓は物事を究めずにはおかぬ性質の禪僧と思われる。かの地において仏典の修業ばかりでなく、「水磨の図」の筆写、茶の研究も

行われ、この「水磨」すなわち水力利用の粉挽きの技法は、後世への示唆すこぶる顕著な導因となったことは明らかである。これは宋國の水磨務という官庁のものをよく観察されたものであろう。茶の研究は駿河の郷土に茶を



宋国より筆写してきた「水磨の図」(東福寺所蔵)

ひろめる手引きとなったことも見逃せない。

辨圓は駿河安倍郡の人。略歴を述べなくてはならないが辨圓は建仁二年（一一〇二）円爾と言った。五歳の時久能山に学び、後に近江の円城寺を振り出しに、東大寺、長楽寺、再び久能山、寿福寺を巡り、宋国の端平二年明州に渡り、天童山その他を回った。更に徑山に登って佛鑑禪師に学んだ。これが大陸修業生活の概要である。（行動範囲が広い。）

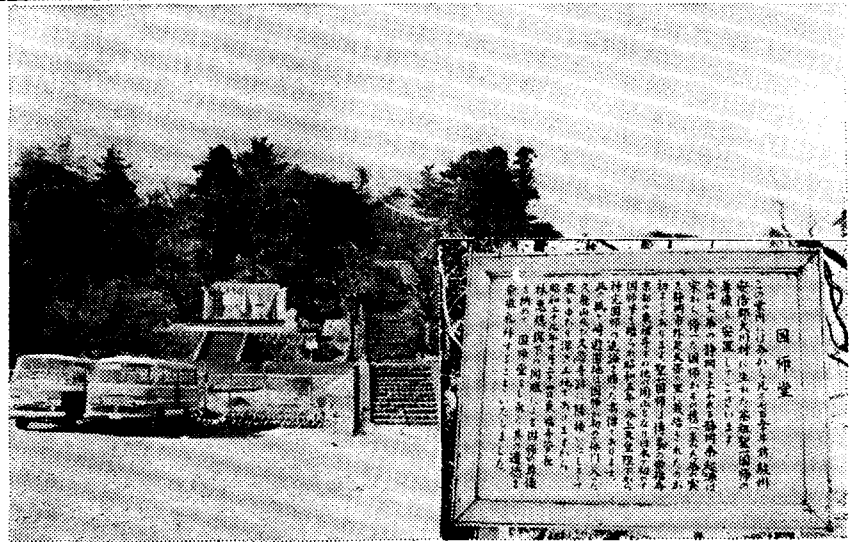
建長七年（一一五五）東福寺は出来上ったが、これより先、嘉禎二年（一一三六）に熱意をこめて発願した九條道家は、すでにこの世になかった。辨圓はこのころ聖一和尚と呼ばれ、近畿における禅の道の唱道者として、一大権威者となっていた。弘安三年（一一八〇）東福寺常楽庵に於て寂す。寿齡七十九。聖一国師の国師号は、後になって、正和元年（一一三二）花園天皇から授けられた勅号で、国師号の第一号である。

東福寺は臨済宗東福寺派の大本山として、知られている。「臨済の喝」の語もあって、日本では榮西が祖。口伝によれば、聖一和尚がこの寺に納まったころ、蕎麦栽培の法を説かれたという。蕎麦栽培が行われ、製粉のことが普及したとすれば、当然まず最初に「そばがき」が現われるであろう。そば切にまで発展したかどうかは別として、十三世紀初頭から、大阪「す奈は」（砂場）の繁昌、十六世紀末まで、ざっと四百年に近い歳月が流れているとすれば、この間何か蕎麦についての伝説

承天寺と聖一国師の業績を伝える立札（博多）



国師堂と茶の起源を物語る立札（静岡県清水市）



なり、記録なりがあってもよさそうなものがあるが、そのことについては明らかでない。静岡県清水市の狐が崎遊園地の一角に、聖一国師堂が建てられている。地元の人たちが茶と蕎麦に対するお礼ごころの現われであるが、国師に関してそれに関する資料は、あまり得られない。ともかく、今日としては、「水磨の図」が東福寺に残されているだけで

も、貴重な資料である。（歴史上では、推古天皇の世に、水臼と称するものが存在したというが、実体は判らない。）古書に「聖一国師伝」のあることは聞いているが、未だ実物を拝見したこともなく、従って、製粉に関する事項がどの程度紹介されているかも察知できない。この点世の人の示教を乞いたい。

（碧々亭路生）